

調査・研究がもとになっている。評者も同研究会において著者と同席した一人である。著者が、限られた条件の中で、精力的に史料を発掘して会をリードされたことが印象的であった。同研究会の成果をも含めて、尾張本草学に関する新発見のいくつかが、著者のデビュー作として刊行されたことは誠に喜ばしい。

また本書は、江戸の歴史のテキストとしても意図されたものか、余話が四題「現代生活の中の江戸、手紙と住まい」「江戸の通信手段『注進手札』」「尾張藩江戸屋敷のアトラクション『町屋』」などが収められていて、江戸の時代相がわかりやすく理解できるよう配慮されている。

(遠藤 正治)

〔北樹出版・〒130 東京都目黒区中目黒一―二―六、電話〇三―三七一五―一五二五、平成十年四月、四六判一九七頁、本体二〇〇〇円〕

琉球大学医学部附属地域医療研究センター編

### 『沖繩の歴史と医療史』

「沖繩の歴史と医療史」という表題に興味をそそられた。先に出版された「沖繩の疾病とその特性」につぐ、第二集というところであるが、発刊の辞に、「永い歴史の中で地域や個人の生活環境は相互に作用し合い疾病の発現や病態へ影響し、さらに遺伝子発現等にも影響したと考え、今回は歴史的な部分に焦点をあてました。」とあるように、地域の疾病と医療史を、

あえて「沖繩の歴史と医療史」としたところに、沖繩の地域性、特殊性を感じたからである。

沖繩は日本の最南端に位置する亜熱帯地域で、他地域とは異なった気候・風土である。また、歴史を遡ると内地の諸国とはその成立経緯も異なり、首里城に象徴されるように、琉球王国として独自の文化の花を咲かせた。近世以後は薩摩幕府の進攻と支配を受け、維新後は明治政府による強制的な「沖繩県」への移行があり、太平洋戦争では沖繩本島が戦場と化して殺戮に遭い、敗戦後は米国海軍軍政府の監督下にあつて自治権を失った。日本に復帰した現在も未だに基地問題を抱えているなど、政治的にも希有な体験を持つ島国ということが言える。したがって、これらの沖繩独特の環境と歴史を無視して医療とその歴史を語ることはできない。本書はそのことを踏まえて、I部「沖繩（琉球）医史概略」、II部「歴史の中の医療史」、III部「沖繩医療史の展開」の三部で構成されており、沖繩という地域の歴史的背景を把握しながら沖繩の医療の過去・現在を理解できるように編集されている。

年表の類は、一般的に参考事項として巻末に付けられることが多いが、本書ではまずI部で沖繩の医史関係記事（年表）に目を通すことによつて沖繩医史の概略を知ることができるよう工夫されており、後続の医療史の理解を助けている。

II部では、沖繩の先史時代から今日までの沖繩史の概説と医療史が語られているが、「黎明期の医療制度」と「民間療法（まじない療法）」に関する記事、保健医療の視点から論じられて

いる「戦後の医療史」などは特に興味深く読ませて頂いた。

III部の各論文は、『沖繩という特殊性』のテーマが十分吟味されていて、精神医療、ハンセン病対策、マラリア、腸管寄生虫対策、歯科医療の各論は、それぞれ発生と蔓延、医療と対策について、沖繩という地域の立地条件や気候など環境との関わり合いを示しながら簡潔に要領よくまとめられている。「南西諸島人の骨格」と「高嶺徳明と補唇（兔唇）術」に関する考察も興味深い論文である。

一般に複数の執筆者によって上梓されている場合、内容によつては専門の違いもあつてか時として違和感を感じさせることがある。本書でも「漢詩文」に馴染みのない者にとつては、なぜ「医療史に漢詩文」なのかと訝る向きもないでもないが、「沖繩（琉球）と中国の文化交流史」は、中国へ留学した琉球人の作品によつて沖繩文化の背景を知る手がかりとなり、その点からも編集に大変配慮されている様子が窺われる。また、本書には所々に「ワンポイントメモ」という欄が設けられている。清涼飲料的役割を果たして、気楽に読めるところがいい。

紙面の都合で言い尽くせなかつた歯痒さを感じさせる部分もあるが、いずれの章も簡潔にまとめられており、分かりやすいので、医学を専門としない郷土史研究家の人々にとつても貴重な資料集となるのではないだろうか。なお、蛇足だが、表紙もすっきりして品良く仕上がっている。

（壹岐 裕志）

九州大学出版会…〒812-0053福岡市東区箱崎七―一―四六、電話〇九二一六四一―〇五一五、平成十年三月、B5判二〇六頁、本体四五〇〇円）

児玉善仁著

### 『病氣』の誕生―近代医療の起源―

この書を紹介するのに、推奨するか批判するか長い間迷つた。その理由は、著者が新しい視点や方法を提示しながら、ヨーロッパのみを考察の対象としているという点で、大きな枠組では、従来の中世史の、やや古い考え方にとどまっているためである。ここでは、著者に対して多少非礼になるかも知れないが、評者が感じたことをそのままのべたい。

イタリヤ教育史の専門家である著者は、長年の研究の結果を医療に広げ、いくつかの社会文化史上の事象を指標として、医療の中世から近代への転換をとらえようとした。それは単に近代医学の確立という内容ではなく、医療の広い範囲にわたつて中世的性格と近代的性格を比較しようとするものである。

出発点となつたのは、治療契約という慣習であつた。著者は、教育における教授契約と比較しながら、この慣習の背後にある観念を検討し、医師に対して治療を要求するということが中世的心性であるとした。医学の変貌にしたがつて、治療でなく診療を対象として報酬が支払われるようになり、これが医師・患者関係の近代的あらわれであるとする。